意　見

獣医療にまつわる愛と依存

矢野　淳[†]（次郎丸動物病院院長・臨床心理士）

ペットとして飼育されている動物は，コンパニオンアニマルとして家族の一員になった．飼い主は，ペットの行動に一喜一憂し，愛着を抱き，かわいがる．さらに飼い主自身の感情を投影し，ペットにも人格があるかのように扱い，洋服を着せ，病気になれば人間並みの医療を当たり前のように受けさせる．飼い主はペットに「愛」を注ぐのである．

獣医療の現場では，飼い主に愛され幸福そうな多くの動物をみる一方，愛するゆえに問題を抱える事例にも遭遇する．例えば，人間と同等に扱い，人間と同じ食べ物を食べさせて何度も病気を繰り返させる飼い主の愛，片時もペットを手放すことができず社会生活に支障をきたした飼い主の愛等である．このような事例は，行き過ぎた飼い主の愛によって引き起こされていると考えられる．愛は時に人を狂わせるともいうが，飼い主のペットへの愛も，時に飼い主を狂わせる．

ところで，「愛」とはどのように定義されるのであろうか．

宗教的に愛は「アガペー」，「慈悲」，「仁」，「徳」などと同義として理解されるようである．向けられる対象によって「家族愛」，「自己愛」，「母性愛」などに分類され，宗教学者や哲学者によって様々に定義付けをされてきた．宗教的な愛，対象で分類される愛は，“いつくしむ”，“自分ことのように想いを寄せる”，“めでる”等の意味を包含しているようだ．

心理学や精神医学においては，精神科医であるM・スコットが，「愛とは，自分自身あるいは他者の精神的成長を培うために，自己を拡げようとする意志である」とし，精神分析学者のE・フロムは，「愛する技術は，先天的に備わっているものではなく，習得することで獲得できる」とした．経済学者でもある飯田史彦は，愛の統合的定義として「愛とは，自分という存在の価値認識と成長意欲から生まれるものであり，相手がただ存在してくれていることへの感謝ゆえに決断し，永続的な意志と洗練された能力によって実行しようと努力する，相手の幸福を願い成長を支援する行為である」としている．これらの愛の定義は，愛が“いとしい”，“かわいい”などの感情的な思慕だけでは成立せず，相手の幸福や成長を願う理性的な意志や行動が伴うものであるという点において共通している．

一方で，愛に似て非なるものとして“関係への依存症（嗜癖：アディクション）”がある．依存症は，“繰り返す悪い癖”であり，酒や薬物等の物質嗜癖やギャンブル等のプロセス嗜癖はよく知られているが，恋愛嗜癖や共依存等，人との関係に執着する関係嗜癖と呼ばれる依存症も存在している

依存症者は，子供の時に不安定な養育環境を経験していることで，親に見捨てられるのではないかということから生まれている漠然とした不安を大人になってからも抱く．同時に，自分自身の存在を卑しめられた屈辱感やそのために生じた世の中に対して慢性的な空虚感を有しており，これらの感情を外からの力（物質やプロセスや関係）を借りて埋めようとするため，常同行動として嗜癖を行うと理解されている．

特に，関係嗜癖の場合は単純に特定の関係に固執する性質が認められるだけでなく，必要以上に他人の問題にお節介に入り込み救済者になろうとし，他人が落ち込むのを見ると必要以上に自分も滅入ってしまい，人の気分を変えようと必死になってしまうという行動パターンが見られることがある．

これは，一見すると人を慮っているように見える行動だが，相手の幸福や成長を願う理性的な意志に基づく行動ではない．自身の空虚感や不安を埋め，自分の存在の安定感を得るため相手をコントロールしようとする行動である．ここが愛と関係嗜癖の行動における決定的相違である．

このようなことを踏まえると前出したペットに人の食べ物を与えて何度も病気にしてしまう飼い主やペットと離れられず社会生活に支障をきたす飼い主は，ペットを健全に愛していると言えるか疑義が生じる．そして，仮にこれらの飼い主のペットに対する行動が愛でない関係

† 連絡責任者：矢野　淳（次郎丸動物病院）
〒814-0165　福岡市早良区次郎丸4-9-42　☎・FAX 092-866-0010
E-mail : bokunennjinn-ay@hotmail.co.jp または jiroumaruanimalhospital@cnc.bbiq.jp

嗜癖に基づく行動であったとしても，これらの飼い主は何らかの生きにくさを感じながら生活をしつつ，ペットを飼うことによりそのバランスを保っているように想像される．

愛は，感情的な思慕だけでなく，相手の成長を願う理性的な意志であり，ひいては自身の成長に繋がってゆく行為である．愛のこの定義を踏まえながら獣医療を行う時，獣医師は医療行為で動物を援助するだけでなく，その飼い主の力になることも可能なのではないだろうか．獣医師こそ飼い主とペットとの関係を「愛」に昇華する手助けができる存在と思われる．そして，獣医師は，「愛」というキーワードで動物と飼い主に関わる時，今までの獣医療に付加した新しいサービスを提供できるのではないかと考えている．

参 考 文 献

［1］ Fromm ES：愛するということ，鈴木　晶訳，紀伊国屋書店，東京（1991）

［2］ 飯田史彦：愛の論理，PHP文庫，東京（2002）

［3］ Mellody P, Miller AW, Miller JK：恋愛依存症の心理分析，水澤都加佐訳，大和書房，東京（2001）

［4］ 西尾和美：共依存症の精神療法，こころの科学，59，39-44（1995）

［5］ 信田さよ子：依存症，文春新書，東京（2000）

［6］ Scott MP：愛と精神療法，氏原　寛，矢野隆子訳，創元社，大阪（1987）